京都大学新聞

学生団体
京都大学新聞社
京都市左京区吉田
京都大学構内
(761) 2054 直通
(751) 2111 (内線2579)
振替・京都3909
(1部50円 1年間2,000円)

クラスコンパの御相談 承ります
割烹 きよす
スキヤキ・ナベ料理一切
寺町通今出川上ル
TEL
(231) 51221
(231) 51243
(222) 51369
(222) 51108

狭山政治決戦勝利へ

九月公判闘争始まる
日比谷に二万三千人

□九・十月狭山連続公判闘争は、九月三日、日比谷野音、公園の二会場に二万三千人の部落大衆、労働者・学生を結集しての闘いによって開始された。寺尾裁・白□
□判長による非人道的訴訴訴の超ト一早期結審一年内死刑判決強動を強引に貫徹せんとする政府、警察、官憲は、この日の闘いに対しても日比谷公園一帯に厳重・白□
□な弾圧体制をもって 身構えた。これに対する闘いは、各地の差別糾弾闘争を狭山差別裁判糾弾闘争の共同戦線へと展開させて、三一闘争に向けて一切の力を、そして全労・白□
□働者階級人民の現在、未来の運命をめぐる闘いの内実を、「狭山差別裁判糾弾／無実の石川青年即時奪還／九月結審・年内死刑判決実力阻止」の一点へと…白□
□集中していく「決戦」として闘われねばならない。

狭山差別裁判糾弾闘争は、九月三日、五日の公判闘争を皮切りに連続七回延の連続非論を軸とする秋期決戦に突入した。一カ月にも亡回という異例の公判ペースにもかかわらず、解放同盟、共闘団体は大量動員による闘争態勢をとっており、この日も会場日比谷公園には、第二会場・野外音楽堂、第二会場・小公園を合わせて、およそ二万三千人の解放同盟、労働者、学生、市民が結集した。八月五日よりの全国を五隊に分けて行進しぬいた全国行動隊も結集した。

権力は機動隊数千による日比谷一帯の弾圧包囲網を、今まで革マル派の介入策動・党派闘争を口実にして行なってきたが、三月五日は革マル派が来きなかったためもかわらず、この方先が部落解放闘争の発展にむけられていることを示した。

この九月公判闘争に向けて、石川一雄青年から決意のアピールが寄せられたが、その中で彼はまず彼に届いたある支援団体からの一通の手紙を引用して「裁判所は公正だから公判闘争でがやがや騒がずともきっと無罪だろう」というその内容を批判し「階級支配延命のテコとしての部落差別のますます強化に対決し、部落解放団盟を中心に労働者・人民・学生やあらゆる差別・抑圧された人々の大合流で人民内の部落差別構造と打ち破り勝利に可欠である」と述べて、公正裁判要求運動終結に対する批判を自ら明らかにした。三日の第七六回公判法廷の非違側弁論は、中田淳護人の「総論」から始まった。

中田淳護人は、「石川君は無実だ。裁判所は無実の判決をくつがえさねばならない。」と前置きし、①石川氏の「自白」に真犯人なら当然出てこなければならない被害者の首にかかっていた細引きひもの使用方法についての供述がみられないこと②石川氏が関巡査に出されていること③もめん細引ひもの出所について中川家から盗んだことになっているが、中川氏は否認していること④これを明らかにするための中川氏の証人喚問に対して、原検事は（居所がはっきりしている）所在不明を主張して出廷を拒否したこと③脅迫状の証拠はボールペンであるこの今まで主張を、被害者の母堂、ただしくすりに変えたことしかも万年筆が被害者のものとする根拠はないこと⑥寺尾裁が警理を打切って、なぜワソの自白が警理されたかを明らかにする機会をうばったこと、を指摘、批判した。

次に佐々木弁護士が「刑事裁判としての狭山事件」というテーマで弁論を行ない、①この事件には合理的疑いのものが非常に多く、それ自身実質的に変化して無罪判決を示している②従って裁判官は秩序維持の立場をすて、人権擁護の立場に立つべきだと主張した。③また松川、八海事件を例に上げて、警察・検察は国家権力を背景にデッチ上げを行なうことがあるとし④殺害方法・食事・死亡推定時間、脅迫状の証拠などをあげて、矛盾した「自由」は使えず、無罪判決のほかはありえないことを主張した。

阿形弁護人は「捜査と物証」について①細引ひもが盲に巻きついているのに捜査当局がこれを重視しないのは、「衝動的犯行」の予断をもったからだ（衝動的犯行を証拠隠滅しているが）②今年はじめて提出された地下足袋は、足跡のコウがすでに破壊されているなど、検事自身が総合的判断を下すべきだという主張を自ら立つ力がえしている③見込み捜査の口実に石田既長のスコップ紛失をデッチ上げたこと④マスコミ操作をしたこと⑤刑事弄百、悪質栄の虚構は、警状にのみ頼るというこの「公平」を欠く裁判である②特に検事は部落差別にもとづく権力犯罪として厳しく糾弾すると主張した。そして最後に水平宣言を読み上げ、傍聴席から拍手が起こった。

午後の公判では、松本弁護人が①被害者が出た日、連続路を通ったすの

タイ・10月以後…

底辺に育つ民主々義

スラム街の人民委員会活動

浪人 誌（香港ほか）・ フアン 誌（タイ 合同版より

世界の大都市の例にもれず、タイの首都バンコクにも多くのスラム地区がある。職を求めてバンコクへ出てきた人々が住みついているこれらのスラムは、開発ブームの一つの集中点でもある。しかし、人民の生きんがための闘いはここに、人民委員会を組織し、市当局との交渉や集会所の建設などを通じて民主々義の芽を育てている。

この生きた団結に比べて、知識人たちの「民主々義」をめぐる論議は机上のものにすぎぬというのが『浪人・プアン』誌編集部の見方である。原題はDemocracy-Class contradictions。前回「革命のスナン」氏とのインタビューと併せて読まれたい。

訳・野沢　朔

（編集部）

昨年の「十月学生革命」そして三人の政府・軍の指導者（タノム・キティカチョーン、その息子のナロン、義弟のプラパート・チャルサティエン）の追放の後、"民主々義"についての多くの議論がなされてきた。学生のグループなど（強力なNSCT＝全国学生センターも含んで）は、タイの寒村の農民たちに民主々義を「教えよう」という計画を高揚し宣伝してきた。バンコクでは民主的な学習講座が開設され、知識人や政治家たちは新しい民主憲法に関する際限ない論議を続けている。

しかし、こうした知的で民主的な外観のもとで、10月革命後の諸変革がどれほどまで農村部の農民（タノムの九割）あるいは労働者階級（人口の一割）にかかわるものであったかは疑しいものである。現に学生たちの鋭く民主々義は貧民たちに政府の経済開発計画について教育するための以前のNSCTの計画を強くにおわせるものである。（実はNSCTは政府の開発計画を貧民の間に広め推進するために、タイのエリートである学生に政府資金を提供した。タノムとプラパートの追放により設立されたのである）

民主主義宣伝隊としての学生

最近タンサート大学の学生たちの手で上梓されたある調査による問題を浮彫りにした。その調査はありふれた小さな貧しい一冊を拾いものであった。

長期は物価の刑を受けて入れられていた刑務所から最近出て来たばかりでもう一人の息子はラオスに服役させられている。働き日がないために兄は会議なる「我慢みを働き、このため彼は逮捕され刑を受ける。一方母親は家賃の支払いをしばらく滞納していた。この家賃はもちろん法外に高いものであった。

このようにしつらえられた状況の真只中に「人民委員会」なる会議を通じて「民主々義」を育てている一人の大学生がいってくる。格式ばったあいさつ――タイのエリートや金持ちの世界でこの通用する――の後、その学生は驚き込んで「私たちはあなた方を助けたいと思っているのです。その前にまずあなた方が人民を組織することによって自らを救済しなければならない。そうすれば私たちは憲法改正運動に協力を結集することができるのです」と語った。この学生がそうそくと退散した後、（すべて金なしで言い立てられて）近所の人がおかなさんに、この不意の訪問者は誰かと尋ねた。「ああ、あのひと彼が誰だか知るもんかね。ただん警察から来たんだろうよ」というのがその答えであった。

この廚の生々しく浮かび上らせた学生の人民にする態度については賞讃と言えるだろう。二月初の「民主々義擁護人民組織」（People For Democracy）十月の新憲法要求運動の中から生まれたグループで、その十三人のビラ配布者の逮捕が十月の学生デモの導火線となった）の一員がその指導者である前NSCT事務局長のチラユート・プーンミーと共にタイでも最も貧困な地方である北東部へ民主々義の恵恵を広めるために出発した。二月九日付パンコク・ワールド紙は彼らの華麗ぶり多次のように伝えている。

「民主々義の貧民にあたってチラユート氏は汚職問題をとりあげこの問題を一掃するための人民の助力を要請した。例えば彼は、もしこの村の村長が散散した地方役人であればデモを起して彼の追放を要求すべきであると説いた。また北タイニー県は彼を引っ張って、CIA（米諜報員）たちの存在を厳しく糾弾し、人民は彼を放逐しなければならないことを力説した。また憲法の方法について彼女は、模範的な憲法概要についてもの話した。

強制退去をうけたクロン・トイの人々

これに比べてクロン・トイの大スラム街は、タイ港湾局所有の土地であり（港の拡張計画のために開発される予定になっている）これまで意義ある勝利はいくつかの獲得されたものの、形の上ではデインデン産業組織には遠んでいないとの村の村長が強制退去を命じられている。

昨年はじめ、バンコクのスラム街のうちでもいちばん貧しくまた最大であるとされているクロン・トイ（二番街区）パンコク家畜社前）の約一〇〇〇世帯が港湾当局から退去通告をうけ、その後さらに別の街区の三四〇世帯が退去通告をうけた。

家を持たぬ貧家が溢れたスラム地区から集まり合同して人民委員会を結成し、港湾局と住宅局を相手に交渉を始めた。結局、住人たちが港湾局の土地の別の区画に一時移り、住宅局は近代的施設を提供する案を作成することで和解した。しかし、この案の実施にとって唯一の障害は、港湾当局が住宅建設用地を住宅局に売り渡すことを拒否していることなのである。

新たに仮設住地となったD街区（二三九世帯）の工事は住民たちによって今も進められている。線なる形の家や堀立小屋を結ぶ湿地の上を渡る木造道路が現在建設中である。D街区人民委員会の委員であるケムトンは、これらの水上道路の建設が今大きな課題となっていると語った。委員会は工事監督責任を負い、委員会が自分自身の利益のために自分の家のまわりの残りの上板を取り付けることになっているのである。

しかし、不動産委員会が住民の幾かかの家に対して強制退去の通告を拒否したので、住民たちは、そこに大きな体育館を建てるという理由で、一九七二年三月二八日までにこの地区から立ち退くように命令された。

ディンデン人民委員会は、ディンデン地区の人々の間に起った立ち退き問題に際して作られたものである。（ここの土地は市の所有地であるので）住民たちは、そこに大きな体育館を建てるという理由で、一九七二年三月二八日までにこの地区から立ち退くように命令されていると語った。

ディンデンは、約三〇〇〇人の人々が居住している古くからのスラム地区である。その住民の生活は、市のゴミ処理員のような仕事に従事している。現在のディンデン人民委員会は、内部起った立ち退き問題の渦巻いている中で、ディンデン住民は、十分な住宅（代的住宅）ができる（一九七六年とか）までその土地に居住することが決定された。この闘いの中で政府と市当局はスラム住民の委員会を事実上承認することを余儀なくされたのである。タイにおいて、人民組織がかのように承認されたのは初めてのことであった。

この勝利に勢いを得て、また多数の団結から生まれる力というものを初めて知ったディンデンの住民たちは彼らの人民委員会を正式なものにすることに決めた。現在ディンデンには九八六世帯が住み、人民委員会は、立ち退き問題の際にすべての成人たちによって選出された人々と、この初期の委員によって指名された新たなメンバーを加えた三八人の代表者によって構成されている。もちろんこのメンバーはすべてのスラム内に住居をもつ人たちからのみ選ばれている。

次に委員会がとりくんだ問題は教育問題であった。

公立の学校に子供を入れるには家族の戸籍簿と住居証明が必要であった。ここに居住している人々は、市の用地に不法に住んでいるためにそのような証明は受けつけられないのです。委員会は、この問題に関して、まだ多数の団結から生まれる力というものを初めて知ったディンデンの住民たちは彼らの人民委員会を正式なものにすることに決めた。現在ディンデンには九八六世帯が住み、人民委員会は、立ち退き問題の際にすべての成人たちによって選出された人々と、この初期の委員によって指名された新たなメンバーを加えた三八人の代表者によって構成されている。もちろんこのメンバーはすべてのスラム内に住居をもつ人たちからのみ選ばれている。

副委員長のソムピョン・プロエメークの説明によれば、委員会が現在手がけている問題は、労働局との水道設備についての交渉であるとのことである。従来、水は大きな貯蔵タンクから買わねばならず、一世帯当りのその費用は一ヶ月四〇バーツもかかるところもあった。

（一バーツ＝約十四円）

ディンデンの住民たちは、政府が近代的なアパートや公共ユニット住宅の建設に着工したことにおおむね満足している。その住宅のほとんどはディンデンの彼らの現在の家の場所に建てられることになっている。彼らの要求に対する公の回答は、それはいずれ、人民の団結による偉大な勝利であると彼らは考えている。

ことを承認した上で、これらの家の一つに電気メーターのある家はから電気を買わねばならないのです。現在、電燈や扇風機は一ヶ月二〇バーツかかります。ここの住人たちが職にありつける場合は、それはいつもレンガ積みや工事現場の人夫などの日雇い仕事です。彼らが一日四〇バーツもらえばいい方で、これで一家の日々の生活費を賄わねばならないのです。そ

ケムトンはまた、港湾当局に働き口を頼っている住人もいることを示して、「港湾当局はその下で働く労働者を当局の土地のスラムに住ませておくことは、印象悪いのでこれを良く思っていないのです。これらの労働者たちには解雇の例がつねに多くの圧力がかけられています。」と述べた。

クロン・トイ鬼場場二番街区（寄り街区の裏）では、ディンデンの居住の住人たちと同様の入学時の百数問題をかかえている。その上、この地区全体に小さな過密の公立初級学校が一つあるだけなのである。十二番街区の人々はこの問題の彼ら自身の解決法を、二一才の居住人、プラティーブさんに見出している。彼女は学校の中に自分の住いを移して、居間は、縁々な年令の六八人以上の生徒を一クラスにして、スラムの子供たちを教え、夜は教員養成大学に通っている。ここの住民たちは彼女のことを誇りしけに、「彼女が私たちの子供の先生です。」と紹介する。プラティーブは初めの頃は彼女の教室の費用に苦労していた。

「私の最初の職は出来高払いの一日平均五バーツになる爆竹包装の仕事でした。その後私は造船所で船のサビ落しのパートタイムもしました」

外から学生たちを招いて子供たちの教育をたのんでいるディンデンの住民たちとは違って、クロン・トイ二番街区の活動家たちは、同じスラムの若い住人の先生、プラティーブに教えられている。彼女の所へ来ている生徒は皆、これまでに市立の初級学校の試験に合格しなかったものである。

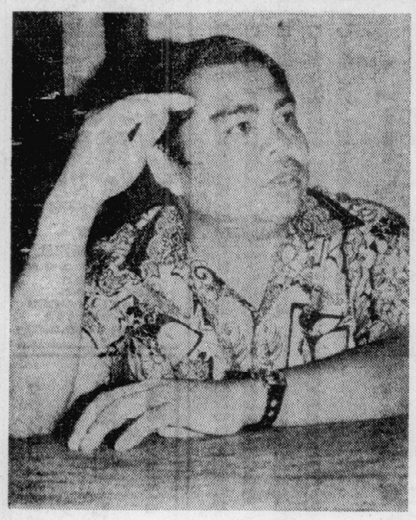
子供たちの勉強を見てもらうお礼として、その余裕のある兄たちは一日一パーツを彼女に払っている。この金は学校の運用費をなんとか購入してやりくりしているのである。しかしプラティーブにとって問題はこれだけではない。教育者と福祉局の両方から、この学校は無認可であるから閉鎖するように勧告され、投獄すると脅されているのである。

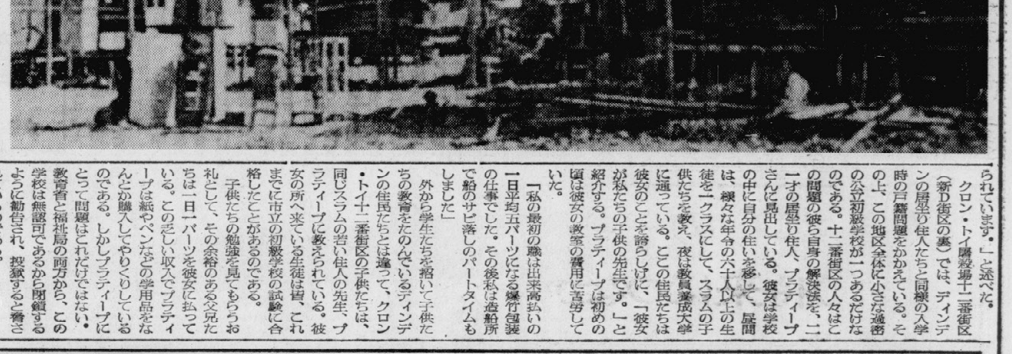
「もし私に対して合法的措置がとられるのであれば、それが何であろうと私は喜んで責任をとりましょう。私のしていることは道義的には正しいことであると信じていますから。私には学校の届出る眼も力もありません」

パンコク・ポスト紙

一九七三年十月四日

（おわり）





インテリはおしゃべりしていろ！われわれには自前の憲法がある

自主的委員会を組織化　住宅・教育をめぐって

ディンデン地区人民委員会

パンコクの政治家・知識人たちの議論とは対照的に、貧しい人民の民主々義とその組織化といえるものが首都の抑圧されたスラム街に芽吹いている。パンコクでの一連の動きは、タイ農村部の農民たちの間に広がる民主々義の芽ばえとは、ある意味で、ちがった性格をもっている。

ディンデンの人民委員会は、ディンデンの住民たちの自主的な組織化の原則を掲げるボランティア組織、VOMOPT（Voluntary Movement for People's Organization in Thailand＝人民組織準備行動委員会）によって与えられている。

一九七〇年にキリスト教徒のグループによって始められたVOMPOTは、スラム社会内での指導的役割を一切拒否し、助言を与えるのもそれを求められた時に限ってきた。

ディンデンは、約三〇〇〇人の人々が居住している古くからのスラム地区である。その住民の生活は、市のゴミ処理員のような仕事に従事している。現在のディンデン人民委員会は内部起った立ち退き問題に際して作られたものである。（ここの土地は市の所有地であるので）住民たちは、そこに大きな体育館を建てるという理由で、一九七二年三月二八日までにこの地区から立ち退くように命令された。

この勝利に勢いを得て、また多数の団結から生まれる力というものを初めて知ったディンデンの住民たちは彼らの人民委員会を正式なものにすることに決めた。現在ディンデンには九八六世帯が住み、人民委員会は、立ち退き問題の際にすべての成人たちによって選出された人々と、この初期の委員によって指名された新たなメンバーを加えた三八人の代表者によって構成されている。もちろんこのメンバーはすべてのスラム内に住居をもつ人たちからのみ選ばれている。

次に委員会がとりくんだ問題は教育問題であった。

公立の学校に子供を入れるには家族の戸籍簿と住居証明が必要であった。ここに居住している人々は、市の用地に不法に住んでいるためにそのような証明は受けつけられないということにおどろいた人もおられます。多くの人は自分自身の利益のために自分の家のまわりの残りの上板を取り付けることになっているのである。

しかし、不動産委員会が住民の幾かかの家に対して強制退去の通告を拒否したので、住民たちは、そこに大きな体育館を建てるという理由で、一九七二年三月二八日までにこの地区から立ち退くように命令された。

ディンデンは、約三〇〇〇人の人々が居住している古くからのスラム地区である。その住民の生活は、市のゴミ処理員のような仕事に従事している。現在のディンデン人民委員会は内部起った立ち退き問題に際して作られたものである。（ここの土地は市の所有地であるので）住民たちは、そこに大きな体育館を建てるという理由で、一九七二年三月二八日までにこの地区から立ち退くように命令されていると語った